

21世紀の沖縄を展望する

沖縄観光の国際化と伝統芸能、文化、沖縄料理の国際化時代へ

堺屋太一 VS 仲里嘉彦

—— 堺屋太一先生は大阪万博、沖縄国際海洋博、大阪築城400年のイベントを担当され大成功を納めたわけですが、今日は、21世紀の沖縄を展望しながらお話したいと思います

沖縄においては復帰20周年記念として、首里城が国営公園として復元する計画であります。ちょうど首里城が築城されてから昭和67年は600年の記念すべき年になりますので、沖縄に対する将来の夢を語って頂きたい。

堺屋 21世紀の沖縄ということについては、今日（11月28日）のアジアラウンドテーブル沖縄シンポジウムの議題にも出ておまして、沖縄は国際化の先端地域としての役割を担うべきだと思うんですね。

従来まで沖縄は、日本全体からするとお荷物という意識がなきにしも非ずであったんですね。補助金がたくさんかかるとか、法制的に不慣れであるとかの意見が強かった。

このようなマイナス面ではなしに、それをプラスに考えて行かなければいけない。沖縄の方々も軍事基地とか、27年間のアメリカ統治とかマイナスの面だけを強調してきた。それをプラスに考えてみる必要がある。

物事には総てマイナス面があると同時にプラス面があるんですが、そのどちらかを生かしていくかが重要なことだと思うんですね。

マイナス面を補って行かなければいかんことは間違いない事実だし、現にそのような努力はされていると思うんですが、プラス面を生かすという発想は今まで余りにも乏しかった。

例えば沖縄は離島であり、その立地条件はマイナスであると考えられてきた。ところが逆に言えば、沖縄は27年間のアメリカ統治であったことは、マイナスの要因もいっぱい残っているが、プラスの要因もあるんだということです。

例えば、外国人と接触する機会が多かったことは、国際感覚が身につけているし、米留帰りが多く国際的な人材が多いということは大きなプラス要因なんですね。

それは、日本の他の地域では持ち得なかった利点なんです。沖縄は離島であって亜熱帯の地域で東南アジアに近いという意味では非常にプラスの面もある。そういうことを積極的に理解し、活用して他の日本の遅れている分野を沖縄が引っ張っていくという発想が必要ですね。

そういう意味で、21世紀に向けて日本が国際化して行くときに、他の地域の人々がなかなか国際化出来ない時に、沖縄がまず手本を示すんだという発想を持つべきだと思いますね。

そして、他の地域が国際化するためには、見習い、沖縄に学べという思想を全国民が持つようにし、沖縄で国際的雰囲気を楽しむ、国際的感覚を養いに来る人達がうんと増えるであろう。それがまた沖縄の誇りにもなるし、実質的な利益になるようにすべきでしょうね。

—— 吉田沖縄協会専務理事もご指摘の点について、発想を転換すべきという考えを持っておりまして、これまでの沖縄は日本の南の玄関口であり、東京のしっぽなんだという認識が強かった。そうではなしに東南アジアの北の玄関口だという発想に切り変えるべきだと言うんですね。

私もその思い切った発想については感銘もしたし、大賛成なんですよ。

それと沖縄県は人口に致しますと、全国の1パーセント、面積は0.6パーセントとなっているが、国の振興開発事業費では2.9パーセントにも達しているんですね。

いつまでもこのような事業費がつくという甘い考えは、国の財政事情からしても許されないことですね。

堺屋 出来ないというよりも、プロジェクトがなくなっているからね。第2次振興開発計画の10ヶ年計画が終る頃までには、だいたい大きなプロジェクトはなくなりますし、現在でもプロジェクトを捜してこいと言われていた時期です。

—— 昨年4月17日には沖縄国際センターもオープン致しまして、沖縄県も国際交流の拠点が出来ましたし、また、かつて15世紀から16世紀にかけて南方との交易によって、当時の琉球王朝が栄えたという輝かしい歴史もあります。このような祖先の遺産を受け継いで行くべきという識者もかなりありますが、一般県民の段階まではなかなか浸透しませんね。

今回、堺屋先生が理事長をなされておりますアジアクラブ主催、沖縄経済同友会後援による沖縄シンポジウムにおいてもメインテーマにもなったようでもありますので、その辺について伺い致したい。

堺屋 まず、外国人と共に生活する、共に生きるということについて沖縄の人は慣れているんですね。

これは何も戦後27年間だけではなしに、その昔から沖縄には中国からも東南アジアからも多くの外国人がはいるり込んでいるんですね。これは250年間の鎖国を経験した日本人にはない経験なんですね。また、最近においてもそうなんです。

日本本土に外国人が入ってくると、たちまち起こるであろう社会的不安も沖縄においては緩和されます。そのことはまた外国人が住みやすいということもあります。東南アジアの人が沖縄に来て日本の技術なり、美意識なりを習得することは東京や大阪に行くよりも、はるかに心地よく交流が出来ると思うし、また、そのことが重要なことなんですね。

だから、フリーゾーンについても物だけではなしに、人が中心にならなければいけない。

沖縄は、技術と日本のセンスを学ぶ窓口であり、東南アジアから見れば日本にアプローチする窓口が沖縄だということです。日本から見れば国際化するための出口が沖縄だという発想を持つべきでしょうね。ですからフリーゾーンの中には、居住地域を設けるべきでしょうね。現在、軍の施設の中にアメリカ人の居住地域があります。そこは治外法権だからいろいろ問題はありますが、一定の限定された中で東南アジアの人達が働きかつ生活する場を設けるべきだと思いますね。

そのことが、また大変な観光名物にもなると思います。

—— 先生は復帰当時、政府の立場から沖縄経済の自立的発展の方向を模索してきたわけですね。この第1次振興10ヶ年計画では、第2次産業の振興にかなり重点をおいた振興計画を打ち出したが、こと第2次産業の誘致については、まったく成功していないですね。

人口と観光面においては、目標を達成しておりますが、これから21世紀を展望する場合、現在の観光産業を振興することは当然のことではありませんけれども、その他の分野についても模索しなければいけないと考えますが……。

堺屋 あのね、第2次産業にしても、第3次産業にしても経済合理性で動くんですね。だから沖縄に経済合理性がない限り、定着しないですね。それは誰が考えてもそうなんです。

沖縄に経済合理性で第2次産業が定着するのは何があるかということ、今申し上げた国際化問題以外にないでしょう。

つまり、沖縄が加工基地として、日本市場への窓口となり、東南アジア諸国の産品を沖縄で最終加工をして日本市場に流そうという企業が本土から進出してくるか、あるいは日本市場に自分のところの産品を輸出するためのアジア企業またはアメリカ企業が進出してくるかでしょうね。

—— その可能性については十分あるという判断でしょうか。

堺屋 そのためにはまず第1に労働力が安いということが必要です。従って東南アジアの人達に住んで貰わなくてはいけない。沖縄の人が中堅高級技術労働をやって、日本の美意識と日本の技術を教える役割を果たし、東南アジアの人がそれらを習得する機会を与えようとするんですね。

技術習得機関は日本の労働者よりもある程度安い賃金で雇用することも可能ですね。

沖縄でやれば日本で加工するよりも安く出来て、かつ日本の市場に適合した商品が出来るという条件をつくり出すことですね。それには外国人の居住を認める以外にはないと思いますよ。

—— このような発想は、沖縄においてはあまりないですね。この前沖縄経済同友会主催で沖銀本店ホールで、先生の講演でフリーゾーンは人を含めたものにすべきであるとの提言がありましたので、上層部の方々にはある程度浸透しているんでしょうが、アクションを起こすようになるまで県民には浸透していないように思いますね。

堺屋 現在、世界の有名な観光地になっているところは、かつての軍事基地ばかりですよ。例えばハワイ、シンガポール、香港、マイアミは全部軍事基地ですよ。何故軍事基地が観光地になるかということ、そこで住んでいた兵隊が新婚旅行なんかで来るからですよ。

昨年（11月27日）に逢った韓国の人が、沖縄はわれわれから見るとミソタリベースの何物でもないし、印象になかったと言うんですね。沖縄に来るまでは観光地とも思っていないし国際化しているところとは思っていませんでした。だからガダルカナル島にクラーク基地に乗ったような印象しかない。沖縄もガダルカナル島にも昔戦争があって、現在でも軍事基地があるという認識しかないんですね。

シンガポールもそうだったんです。日本がシンガポールを陥したときは大要塞という印

象しかなかった。それが今では観光地になり、工業加工基地になり、金融センターにまでな
って東南アジアでは、断然高い国民所得になっているんですね。それは何故かという
と軍事基地をプラスに使ったからなんです。同じことは加工基地もそうなんです。そ
こで東南アジアの人が日本向けの製品をつくるために、働いているんです。その人達
が三年経って技術を持って帰って企業の経営者になり、あるいは工場のオーナーにな
ったらその人達がまたもどってくるんですよ。

おやじのいた所とか、夫のいたところに帰ってくるから国際的な観光地になるんですよ。

—— ハワイも年間 500 万人くらいの観光客があるようですが、沖縄にもハワイからもよ
く観光団が来るんです。現在ハワイの沖縄県人会会長をやっております東恩納氏に聞きま
すと、沖縄は本土の観光だけを対象に施設が整備されているというんです。施設の面ばかり
ではなく、観光案内板でも日本文だけ書いて英文で書いたのは殆どないとの指摘を受けた
ことがあります。そう言われてみますと外国人に対しては不親切なんですね。それはちょっ
とした気配りで出来ることなんですけれども……。

堺屋 沖縄の観光が成功したのは、復帰から 10 年間に日本人向け観光を開発したことな
んですよ。

復帰の時に沖縄の観光は駄目だと言ったのはいっぱいいたんです。ところが、日本人向け
に観光開発したことは大成功であったわけですよ。

国際観光開発はこれからなんです。

沖縄の文化が観光的価値を見出すまでに 5 年かかっております。やっとなら海洋博の年です
よ。例えば沖縄の踊りとか、民謡とか、赤瓦の屋根なんか価値はあるとは思っていなかった。

だから僕なんか来たときは、沖縄には昔ながらの赤瓦屋根がありますねというのと、沖縄
の人はみんなあんな昔のものがあつてはずかしいと言うんですよ。早く鉄筋コンクリート
に建てかえなければと言ったんです。

沖縄国際センターは全部赤瓦ですし、沖縄の文化が価値あるものだと分ったことは大き
いですよ。

沖縄の舞踊は価値あるものだと思うから、このハーバービューホテルでも毎晚上演して
いるわけですよ。それは本土に対してだけではなく世界に対しても価値があるものだと
分ってくるでしょうね。だから沖縄ファッションについても、もっと打ち出されるべきだ
と思うね。

そういう意味では、首里城の再建なんかは、正に沖縄文化の象徴ですよ。沖縄独特の建築
なわけですから首里城が再建される雰囲気になってきたことはよいことですね。

沖縄が国際化してくるとフランス料理を出した方がよいと思うでしょう。ところがそう
じゃないんだよね。沖縄料理を国際化しなければいけない。

首里城の再建についても、沖縄の文化に対する価値あるものだとみられたということで
意義があると思うし、そのような造りをしなければいけない。

今流れは、いわゆるモダンリズムからコーストモダンの時代なんです。モダニズムという

近代建築とか、近代文化に対する大変な疑問が出されているんですね。だから新しいものもいいということではないんですよ。それぞれの地域の文化性を古いものでも、いかに現代化していくかということなんですね。

首里城は、この前見せて頂いた資料によると、いろいろなものが出来るんですね。

それから沖縄シンポジウムで提案されていた、カルチャーオリンピックなんかも大変よいと思いますよ。

—— 本日はどうもありがとうございました。

自治新報 昭和61年1月号掲載